
特集「ネオ・サイバネティクス」・論文

意味の回復による喪失体験の価値の反転——心的システムの発達モデル

Meanings recovery enables us to survive loss experiences: a model proposal of psychic systems development process

キーワード：

喪失体験 心的システム 進化 フランクル オートポイエーシス

keyword：

Loss experience, Psychic System, Evolution, V. E. Frankl, Autopoiesis

山梨英和大学 大井 奈美

Yamanashi Eiwa College Nami OHI

要 約

本研究の課題は、喪失体験における意味の回復プロセスを明らかにすることである。フロイトによれば、喪失体験の本質は意味の喪失である。意味が回復されてはじめて喪失とともに生きられるようになり、喪失がその後の人生の礎になりうる。

本研究の方法として、構成主義の立場から心を一種の自律的なシステムと理解する「心的システム論」を参照する。心的システム論は、主にオートポイエティック・システム論に基づく、心をめぐる様々な研究を含む。社会情報学はそれらを理論的に参照してきた。心的システム論は、いかなる内的な意味や価値の実現に向けて心的システムが「作動する」のかに注目する。この分析観点は、喪失体験をめぐる苦しみの原因と癒しについて考察するために有益と思われる。

本研究は、喪失の意味が回復または再構成される過程を「4モードモデル」として提案する。そこでは、心的システムが意味を創出する基準（「成果メディア」）を4つの段階に類型化した。システム進化の観点から4モードモデルを心的システムの発達モデルとして理解することで、従来の心的システム論の展開を試みた。

原稿受付：2019年2月4日

掲載決定：2019年4月18日

結論として、心的システムが意味構成体としての自律性・閉鎖性を発現させ、個別的な理想性を克服する普遍的な自己超越を志向することが、喪失の意味回復を可能にする。最終的に、同様に苦しむ他者の内的観点に立って他者を理解する「内部観察者」へと心的システムは進化しうる。このとき喪失の絶望から「愛」が生じる価値の反転が起こる。

Abstract

This study intends to clarify the process of recovering loss experience's meaning. According to Freud, the essence of loss exists in loss of meaning. Only after recovering meaning can we live with loss and can the loss be the basis of the rest of our life.

Our main theoretical framework is psychic systems theory that understands our psychic mechanism as an autonomous system from a constructivist viewpoint. Psychic systems studies include various studies on psychic mechanisms, that are mainly based on the autopoietic systems theory. The studies have theoretically enriched socio-informatics. Psychic systems theory focuses on which meaning/value a psychic system chooses to realize. This approach is useful in considering the cause and healing of loss-based melancholy.

This study newly proposes the “4 modes model” that clarifies the process of recovering or reconstruct the lost meanings. In the model, there are 4 types/steps of codes by which a psychic system constructs meaning. The 4 modes model is also understood as a psychic development model from the viewpoint of psychic systems evolution, extending earlier psychic systems studies.

As a result, this study clarifies that loss experiences meanings can be recovered when a psychic system fully realizes its autonomy/closure as the meaning construction agent. The psychic system cherishes an universal attitude of overcoming individual ideals. Eventually psychic systems can evolve into an “inner-observer” who understands others' sufferings from their inner viewpoint. This love that emerges from despair of loss means a turning over of loss experience value.

1 はじめに

人生では多面的に現実化する喪失体験に直面させられることがある。それはいわゆる「〇〇ロス」という言葉では必ずしも表現しきれない苦難である。身体面では、老いや怪我、病や過労などによって身体は傷つき、機能を失い、死を迎える。社会面では「親」や「配偶者」などの役割喪失が生じ、環境面では故郷や文化から引き離される。効率や利益が最適化される現代社会では、さらに精神面での尊厳の喪失が起こりうる。情報技術を背景に「機械論的世界観」が強まると、人を機械化・道具化するその見方が、公的關係だけでなく私的關係にまで侵入してくる。私たちは無自覚にその見方を押しつける加害者にもなりかねない。「機械論的世界観」の被害者も加害者も、人としての尊厳の喪失、人が人であることの意味の喪失という危機に直面している。

このようななかで、いったいいかにして私たちは喪失とともに生きられるのだろうか。喪失体験は人生を危機に陥れ、元の自分であり続けられないほど決定的な影響を及ぼすばかりか、それを生き延びられないことさえありうる⁽¹⁾。この点で喪失体験は、私たちに生きる意味や価値を根本的に再考させる典型例と言えらるだろう。

社会情報学は、社会的な情報現象、すなわち多様なコミュニケーションをつうじた情報現象を研究対象とする。そこでは「情報」概念が、情報技術で処理される信号やデータとしてよりも、人間を含む生物が生きることによって生じる「意味」や「価値」として、哲学的に捉え直されている。情報概念の根本的な再考をつうじて、情報概念が拡張されたとも言えらるだろう⁽²⁾。

本研究では、喪失体験のなかでも、様々な場における人間関係の破綻を主な研究対象として想定する。それは、生きる意味や価値がコミュニケーションのなかで問い直されるメカニズムを考察するのに最適な事例の一つと思われるからである。

その際の方法として、構成主義の立場から心的メカニズムを考える「心的システム論」を採用したい。ここで言う心的システム論は、社会情報学が理論的に参照してきた、心的過程をめぐる種々の研究の総称である⁽³⁾。それは、外的な刺激と反応とが一對一に対応する機械的システムとして心的メカニズムを捉える、構造決定論ではない。むしろ、いかなる内的な「意味」や「価値」の実現に向けて心が自律的に作動するのかに注目する。

とりわけ本研究では「システム進化」の観点に注目して⁽⁴⁾、従来の心的システム論とは異なる新たな「心の発達」モデルを提案する。喪失体験の事例分析をつうじた心的システム論の拡張によって、心の情報学の理論的研究に寄与したい。

2 問題の所在——喪失体験の本質としての「意味喪失」にいかに向き合うか

2.1 悲哀とメランコリーの違い

喪失を生き延びる方途を見出すために、まずは喪失体験の本質について考えよう。フロイトは喪失によって引き起こされる心の痛みを悲哀とメランコリーの二つに区別し、両者の違いをつぎのように明らかにした（悲哀を悲しみにメランコリーを深甚な抑うつに、それぞれ言い換えるとわかりやすい）。

「いくつかの症例で、メランコリーは、明らかに愛する対象の喪失に対する反応としておこっている。他の誘因についてみると、この喪失ということはむしろ観念的な性質のものであることがわかる。対象はいわば現実に死んだのではなくて、愛の対象という点では消失して^{しま}ったのである[……。]。また他の例では、こういう喪失が確かに仮定できるはずなのだが、何を失ったのかがはっきりわからない。[……。]のみならず、メランコリーをおこした喪失が患者にわかっているときにも、こういう場合がありうる。というのはつまり、誰を失ったかは知っているが、その誰かに

ついて、何を失ったかを知らないのである。従って、こういう風に考えてよいだろう。メランコリーは、何らかの意識されない対象の喪失に関連し、失われたものをよく意識している悲哀とは、この点で区別される⁽⁵⁾。」

メランコリーの誘因として、まず死別（「現実に死」ぬ喪失）や別離など（「観念的な性質」の喪失）によって愛する対象を喪失した場合が挙げられている。また、喪失対象についてはっきり自覚できない場合もあるという。さらに、たとえ喪失対象を自覚できていても、それによって自分が何を失ったのかがわからない場合もあるのだと続く。

死別においても、別離や失望においても、愛する対象として「誰を失ったかは知っているが、その誰かについて何を失ったかを知らない」ときにメランコリーが起きるという指摘が重要と思われる。そして逆に、喪失対象について自分が「何を失ったか」を意識できている場合に悲哀が起こるという指摘も同様に注目に値する。

フロイトの引用は一見、「何か」を失うよりも「誰か」を失う方が相手の唯一性を悼むことにつながるのではと疑念を感じさせるかもしれない。しかし筆者は、「誰」と指し示すことができる対象自体というより、その誰かとの関係において生じる意味や価値こそが失われた「何か」に相当すると、フロイトの言葉から考えている。

「何を失ったか」を意識できることは、喪失対象の意味や価値をよく知っているということでもあるだろう。愛する対象の意味や価値は、対象の唯一性と自律性が交差する次元に存すると考えることができる。なぜなら、唯一性は相手の本質にかかわり、また介入不可能な自律性を有するからこそ代替不可能な存在と言えるからである。自律性に基づく唯一性は、自他の関係から新たに生まれる意味や価値の礎でもあるだろう。

以上を勘案すると、（1）愛する対象の唯一性と自律性の意味、それに基づく（2）相手との関

係や共有した時間の意味を適切に自覚できないときに、メランコリー（深甚な抑うつ）が生じうると考えられる。それまで続いてきた関係性の喪失による後悔や未来の不安は、無力感にとどまらず自己否定感まで生じさせることがある。それはメランコリーの中核と思われる。

2.2 メランコリーから意味の自覚を経て悲しみへ至る回復過程

以上のように、喪失体験の本質が意味の喪失にあるという立場に立つならば、メランコリーを癒すためには、意味の次元すなわち心に目を向けて、失われた意味や価値を自覚することが課題となる⁽⁶⁾。

まず上記（1）の「愛する対象の唯一性と自律性の意味」を自覚するには、喪失相手との「同一性」ではなく「差異」の尊重が必要だろう。もし相手と自分とを一体化するほど近い存在と感じるなら、唯一性を基礎づける自他の差異に盲目になっているのかもしれない。たとえば失恋のように一体性が破れた際に起こりうる禁断症状的メランコリーは、依存的同一化が叶わない心の囚われに起因することがある⁽⁷⁾。相手の有益さを惜しむかわりに自由を尊重できれば、喪失が相手の真価を変えるわけではないと思える場合もあるだろう。

つぎに（2）として挙げた「相手と自分との関係の意味」を自覚するためには、以下の二つの方法が考えられる。第一に、目に見える結果よりも相手との歴史のなかで自分が肯定的に変えられた部分を「目に見えない実り」と捉える観点を持つ方法である。第二の方法は相手との関係性を変化させるコミュニケーションである。関わり方の変化は、相手をめぐる意味や価値が再創造されることの現れとも言える。具体的には、直接的コミュニケーションが可能な場合は感謝や謝罪を伝える「埋め合わせ」の形をとることが多いと思われる。「埋め合わせ」は、依存的関係性から回復するために必要な行動の一つとしても提案されてきた⁽⁸⁾。

それによると、直接的コミュニケーションが不可能な場合でも埋め合わせになるような新たな行動様式を身につけることで時間がかかっても相手へ代替的な埋め合わせができるという。

以上のように、意味を回復させることによってメランコリーを悲しみに移行させることが、喪失を生き延びるための一つの有力な方法であると考えられる。臨床家で心理学者の小林真理子は、その豊富な臨床経験をつうじて「悲しみによって自殺した人を見たことがないが、抑うつによって自殺する人は後を絶たない」とし、「悲しみにはそれに耐える力も共に備わっている」と述べた⁽⁹⁾。たとえ果てしなくても悲しみとは何とか共に生きていけるが、メランコリーとはそういかないというのである。

上記(2)の「相手と自分との関係の意味」を自覚するための二つの方法に即すと、喪失体験の意味回復のための契機はつぎの二つの源を有していると考えられる。第一に「喪失体験の後でも、喪失や喪失に至るまでの過去の意味を変えることができる」という気付きである。つまり喪失にもかかわらずそれで終わりではないという希望である⁽¹⁰⁾。これに関連する第二の源は、「相手とのコミュニケーションをつうじて相手の傷を癒し、相手にとっての過去の意味を取り戻してもらえる可能性がある」という気付きである。これは自分の感情より相手の意味回復を優先させる自己超越であり、自分のしたいように相手へはたらきかけることではない。相手の意味回復を助ける態度は、結果的に自分にとっての意味回復にもつながる。

まとめると、喪失体験からの回復の契機となるのは「過去の意味を反転させて新たな意味を創出・構成していく」ことであり、さらに言えば、「その力は自分にしかないと知ること」である⁽¹¹⁾。とはいえこれは意味回復が自力のみで達成されることを必ずしも意味しない。たとえば、喪失の絶望にある時、共に苦しみ泣いてくれるような助け人に恵まれ、その結果、少しずつ意味への意志を

回復し、行動できるようになることもあるかもしれない。

以上の議論を、喪失のメランコリーから脱する二段階としてまとめ直してみたい。すなわち第一段階は、喪失体験の本質が意味の喪失であること、そして意味の回復＝新たな意味創出の可能的契機が自己以外にないことを知る「自立」、第二段階は、他者との間で意味を回復させていくための具体的行動、すなわち「自己超越」である。第二段階は終わりなき過程である。メランコリー（抑うつ）を悲哀（悲しみ）に移行できたとしても、喪失の悲しみと共に生きるなかで、メランコリーに再び陥る可能性は常に潜在しており、そのたびに自己超越を繰り返す必要があるからである。さらに進んで、もし同様な喪失のメランコリーに苦しむ他者に寄り添うことができたなら、そのとき果てしない悲しみは、いわば他者への「^{かな}愛しみ」へと昇華されているとも言えるだろう⁽¹²⁾。

この二段階からなる喪失の癒しの過程は、心の発達過程とも理解できる。以下では癒しの二段階について、心的システム論を援用した理論的考察を述べ(3.1および3.2)、続いて心的システムの拡張モデルを提案する(3.3)。

3 意味回復に即した心的システム論の深化——4つのモード分類

3.1 自律的な意味構成体としての心的システム——「閉鎖性」に基づく意味創出の秩序づけ

まず、意味回復における「自立」はいかに理論的に裏付けられるのか。意味や価値は主に心のはたらきに関わるものであり、言い換えれば、心とは意味構成体である。

この観点から、既述した「心的システム論」が注目される。それは心の分析に「オートポイエーシス理論」を応用する研究である⁽¹³⁾。オートポイエーシス (autopoiesis: 以下ではAPと表記) は自己を意味するギリシャ語「auto」と創出を意味

する「poiesis」を合わせた造語である。細胞分裂のように自分が自分を生みだす自律的な性質に光を当てる、生命科学に出自を持つ概念である。自己創出とは「構成」(construct)することなので、APは構成主義 (constructivism) の概念と評価されている。

心的システム論では、心は一種のオートポイエティック・システム (以下ではAPSと表記) とみなされる。システムという捉え方は、分析対象をつくる個々の要素というより、それらの要素が全体として結果的に実現する機能に注目する、機能主義的な関係理論である。たとえば身体の循環器系や神経系などのように、個々の臓器ではなくそれらの相互関係をつうじて全体として実現される不可視の機能に注目する。したがって心的システム論では、個々の感情や思考だけでなく、むしろ、それらが全体としてどのような目的や価値を実現させているのかが主要な論点となる。

心的システムの自己創出性は、システムの「閉鎖性」に基づくと考えられてきた⁽¹⁴⁾。システム論で言うところの閉鎖性とは、閉ざされた心のような否定的意味では全くない。システムの閉鎖性とは、単純な機械のように入力と出力との対応関係がはじめから決まっていなかったことを表すシステムの「自律性」と一体化した概念であり、APSの可能性の中心をなす特質とされている。APSは、システムに取り込む外部の出来事を重要性の判断に即して取捨選択できるし、同じ出来事にたいしてどのように意味づけるかも決まり切っていない。APSは過去の体験に基づく固有の解釈枠組を持ち、同じ入力刺激を受けても、それに対する意味出力はさまざまである。

APSに基づく心的システム論から喪失体験における意味回復を考えるならば、意味を再び作り出す意味構成体は、心的システムである。心的システムは、意味解釈＝意味創出をつうじて自分を取りまく現実 (reality) までも作り出すほどに自律的である。つまり、独自のものの見方に調和する

ように外部刺激を選択・解釈して他者との関係を含む現実を構成する。

心的システム論を用いる利点の一つは、それがどんな意味 (例えば喪失の苦しみ) をも、他のシステムが構成する意味 (苦しみ) と比較して過小評価しない点にある。しかし、意味の自己創出を基礎づける閉鎖性は諸刃の剣でもある。なぜなら、無秩序な自己創出は破壊的になりうるからである。このようなAPの暴力的な面をがんのイメージで理解する見方もある⁽¹⁵⁾。恒常性を維持するというAPの本質が「暴走」して、全体として実現すべき意味を度外視するように閉鎖性が実現されると、自己保存や利益拡張だけがシステムの作動原理となってしまう、閉鎖性は開放性に反転してしまう。

開放性とは、外部刺激にたいして他律的に反応するようにみえる様態であり、ここでは心的システムが快または不快な外部刺激にたいして決まりきった反応を生じるような様態である。もし刺激に嗜癖するような依存状態が常態化し、その結果自分の幸不幸の源を他者や環境に責任転嫁するまでになれば、APSが擬似的に陥っている機械的な存在としての開放系の弊害が強まっていると分析できる。APSとしての心的システムがそれを取りまく現実も構成していることを想起すれば、幸不幸の原因を他者や環境に帰する見方は、APSの意味創出機能不全を投影しているにすぎない場合もあるだろう⁽¹⁶⁾。

とはいえ、そのような反応の様態は、特にシステムが喪失体験などの危機的刺激に直面させられた際には当然起こりうるものでもある。また、快楽やメランコリーは克己主義だけでは必ずしも十分に対処できない。こうした両様の作動を捉える視点が心的システム論には内包されている。

3.2 自己超越性による「内部観察者」概念の深化

つぎに、他者との間での意味回復に欠かせない

自己超越⁽¹⁷⁾の必要性はいかに理論的に裏付けられるのか。自己超越を視点の変化によって捉え直してみよう。

APSは閉鎖系であり、いわば主観的視点、ないし一人称視点で存在している（これをシステム論では「一次観察」と呼ぶ）。一次観察の立場から見たAPSは、ある意味では自分の利益を最適化するために他者や環境を利用する「利己性」を本質として作動する。しかし、すでに述べたように喪失は一人称視点による理解だけでは十分に意味を回復できない点で、いわば自力の及ばない体験である。意味構成の可能性が自分だけにあると知るとは、喪失の意味が自己完結するということでは決してなく、むしろ必要に応じて他者にはたらしかける態度を含んでいた。したがって一人称視点での損失に注目するより、同じ喪失体験の影響下にあるかまたは当事者に含まれる他者に寄り添う脱一人称の視点で喪失の意味の再構成を試みる必要がある（これはシステム理論における「二次観察」と理解される⁽¹⁸⁾）。それは、狭義の一人称的な利害を超越して他者の立場から新たな意味を創出しようとする「意味への意志」であり、恒常的自己保存に基づくAPの作動を相対化しようとする点で「自己超越的」と言ってよいだろう。

言い換えれば、心的システムの閉鎖性を破壊的な方向にではなく意味の回復という創造的な方向に発現させて、自己と他者との差異（唯一性・自律性）を保つためには、APSの作動を「秩序づける」ことが不可欠であり、その秩序づけは一人称的な立場を超えた観点（二次観察）の導入によって可能になる。すなわち、二次観察は心的システムの作動を秩序化する要因として理解できる。

二次観察が秩序化を意味すると言っても、喪失の意味回復に寄与する秩序となりうるものは、押しつけられる道徳でも分析的客観視でもない。その秩序は、喪失体験の意味を回復させるための「理解の枠組」であり、そのための二次観察とは、喪失に苦しむ人の心的システムというAPSの特質を

理解し、それが新たな意味を構成していく過程を描き出す「人格的」作動である。

人格という用語は精神医学者のV. E. フランクルの議論を参照している。フランクルは人間の存在を身体（body）・心理（mind）・精神（spirit）の三分類で捉えた⁽¹⁹⁾。このうち心理領域には感情や思考力を含む性格が、精神領域には人格がそれぞれ対応するとされる。そして身体・心理が自己保存を基本的な目的とする一方で、精神は自己超越を特質とし、自己保存よりも高次の目的に向けられたものとされる。

フランクルの議論で興味深いのは人間の唯一性（代替不可能性）が人格領域（精神次元）に根ざすものと考えられている点である。利己的目的を排して自己超越するほどに唯一性が発揮されるのは、非常に逆説的な真理と思われる。また、思考が自己保存的な心理領域の属性とされる点は、思考力の限界を示唆するものとも理解できる。理性的思考や知性は利己的目的に基づく主観的・感情的判断の正当化に使われてしまうことも多く、それ自体で十分な価値を有するものとは必ずしも言えないからである（この点は、後述する「感情的観察者モード」の限界に相当する。感情的観察者は感情だけでなく思考力や知性も有する⁽²⁰⁾）。知的判断の押しつけは他者を傷つける暴力になりかねない。その点で、意味回復のプロセスにおいて、単なる分析的観察には限界がある。このことは、知的能力に代表される人間の能力と、その人だけが持つ価値（唯一性）とが別次元に属するという見方とも一致する⁽²¹⁾。

一人称的な立場を超えた観察者であり、しかも単なる分析的観察者ではない「まなざし」を示す概念として注目されるのは、APS理論を情報学に応用した基礎情報学の「内部観察者」概念である⁽²²⁾。内部観察者とは、観察されるAPSの「内的視点」に立って観察・記述する人の心的システムとされる。喪失体験における意味回復に際して、内部観察者は自己超越によって相手に成り代わる。それは暴力

的な同一化とは異なり、知的判断を押しつけない理解と受容を前提として、相手の唯一性・自律性を保つ見方である。ここで行われる内部観察は、他者に対する成り代わりの対等性を特徴としている。

意味回復の過程において、この内部観察は自分自身にたいしても行われる必要がある（自己観察）。なぜなら、心的システムが再帰的に創出する世界観や自己認識が他者との関わり方を方向づけるからである⁽²³⁾。また、自己観察は、超越性への志向を選択・維持する前提とも考えられる。

3.3 心的システムの4モード

以上で考察した点に基づき、心的システムのモード分類を試みたい。すなわち3.1で論じた自立を横軸に、3.2で論じた自己超越を縦軸にした4分類である。これを「4モードモデル」と呼ぶことにしよう（図1）⁽²⁴⁾。

4モードモデルはI、II、III、IVの順に「進化」する心的システムの発達モデルでもある。ただし、各モードにはすべて必要性・必然性があり、絶対

的な優劣や善悪の基準で論じることはできない。一般に進化と進歩とは異なる概念であることから、4モードモデルは道徳的批判や自責に誤用されてはならないと考える。モデル化の第一の目的は、喪失体験に伴うメランコリーの原因を明確にするとともに、メランコリーが悲しみを経て共感としての愛^{かな}しみへと移行する過程についても理解しやすくすることにある。この目的は結果的に、喪失体験をつうじて心的システムがいかに発達していくのかを示唆する。

横軸は具体的には閉鎖性に基づく尺度で、縦軸は内的に寄り添ってあたかも自分のことのように体験的に共感する内部観察の尺度である。なお、縦軸の「内在性」は、内部観察だけではなく、相手と一体化するように感じられる身体的・情動的体験を含んでいる。そうした体験も相手を内側から経験するように感じられるはずだからである。一方で「外在性」とは、相手との一体感が破れた際の感情状態や分析的思考による外的評価を指す反面で、安易に判断しない距離を保つことも指す。

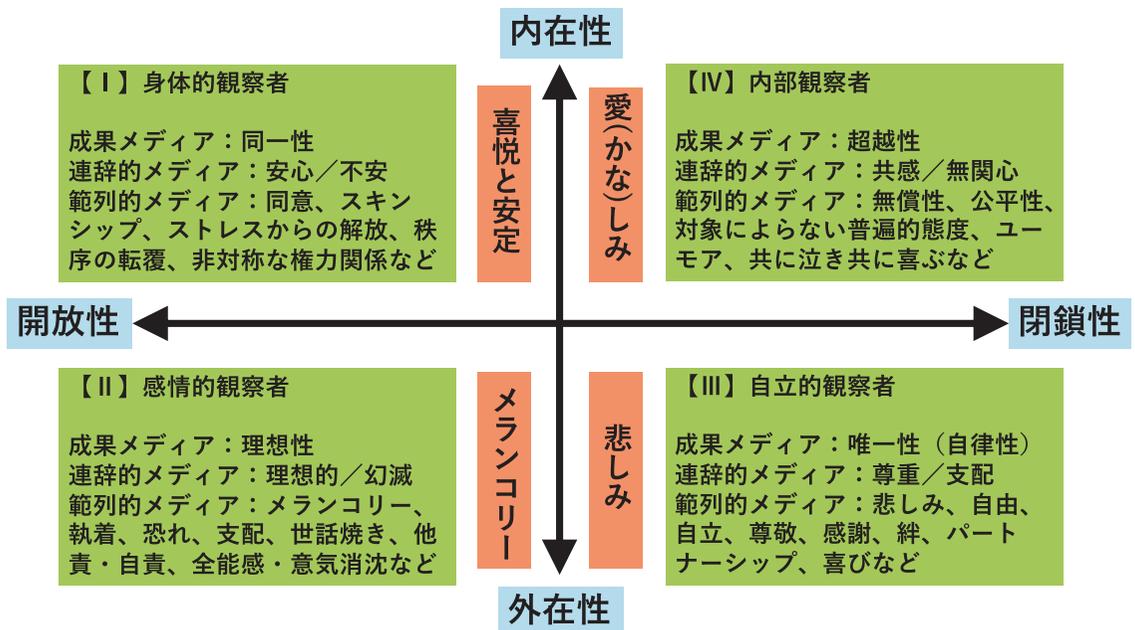


図-1：心的システムの4モード

詳細は4.3で述べるが、(Ⅱ)感情的観察者モードでは冷たい裁きでありうるのにたいし、(Ⅲ)自立的観察者モードでは自己の基準で他者を裁かないこととして実現される。このように外在性といっても正反対の態度になりうることに注意が必要である。

4モードそれぞれの特徴は次章で詳しく論じ、ここでは各モードがどのような内的機構によって特徴づけられるのかを述べたい。内的機構とは「成果メディア」「連辞的メディア」「範列的メディア」の3つであり、これらは一体として機能する⁽²⁵⁾。ここで言う「メディア」は3.2で必要性を指摘したAPを秩序づける機構を意味する言葉である。心的システムが志向する「意味や価値」という目的の違いによってモードが分類されるため、その内的機構は意味論的な秩序である。

成果メディアとはまさに心的システムが「成果」として実現を目指す価値であり、それに向かって心的システムの認知や思考などが導かれていく「憧れ」や「志」と言ってもよい。成果メディアの変化に伴ってシステムが発達・進化する。

成果としての目的に向けて実際に認知や思考が連なって生じるのを助ける判断基準が連辞的メディアであり、便宜的に「A/非A」という二つの値で表現される。Aと非AのうちAという肯定的な値を無意識に選びとるようにして認知や思考が続く。たとえば身体的観察者は相手との「同一性」という目的のために、相手と一体化する「安心を得られるか否か」という基準で個々の刺激が判断され安心感につながるような刺激が認知や思考の素材として選ばれる(逆に言えば相手と分離する不安を煽るような刺激は排除される)。そうして生じた認知や思考はまたつぎの認知や思考の刺激・素材となっていく。

判断の結果として認知や思考が実現された具体例を表すのが範列的メディアである⁽²⁶⁾。認知や思考が表現される事例の範疇を示すものと言ってよいだろう。(Ⅰ)身体的観察者モードでは、相手

と一体になるような安心感は同意やスキップの心地よさやそれによるストレスからの解放などとして実現される。

なお基本的には従来、成果メディアなどの概念は心的システムに応用されてこなかった。また、成果メディアなどが異なればシステムも別物とされる。しかし本研究では、成果メディアなどの概念を心的システム研究に応用し、具体的な4つの実現態に区別した。そのことで、思考の内容に踏み込むとともに、内在性/外在性という新たな区別を導入する、発達をめぐる詳細な分析を行う。さらに連辞的メディアは本来、「二値コード」のほかに、それを判定する「プログラム」も含む。たとえば、学問システムの二値コードである「正/誤」を判定するプログラムは各種の「理論」である。従来はプログラムの変遷としてシステム進化が論じられてきたが、本研究では理解の便宜上、プログラムをめぐる議論を省略した。

次章では実際に4モードモデルに即して喪失体験を理解することで、喪失を生き延びる道筋のより明確なイメージを得たい。ここでも便宜上、人間関係の破綻に伴う喪失体験を主な事例と想定して議論を進める。なおシステム理論では、刺激の意味を解釈する主体として、システムは「観察者(observer)」と呼ばれる。そのため心的システムの各モードは観察のあり方の違いによって区別されていると言ってもよい。

4 意味回復による心的システムの発達モデル

4.1 【Ⅰ】身体的観察者モード

身体的観察者モードは、同一性(相手との一致)を達成することで喪失体験に対処しようとするあり方である。身体的観察者が目指す相手との同一性、一致への志向は、安全本能ともいうべき「情動」に基礎づけられていると考えられる。

身体的観察者モードは、刺激にたいして反動的な、心の自然状態と評価できる。なぜなら、情動

とは各人が喜怒哀楽の感情として意識する以前の身体的反応だからである。そのような本能的な情動は生きていくうえで必要なものでもあり、また心のはたらきが情動に大きな影響を受けていることも疑いない。だからこそ身体的不調が心の落ち込みとして頻りに経験されたりするのだろう。

身体的観察者モードにあるとき、心的システムは「安心」を求めて作動する。しかし、根源的な安心感が常に十分得られるとは限らない。なぜなら「はじめに」で論じたように現代社会において私たちは効率よく義務を果たす有用な存在であるよう期待されており、そのことが、有用な存在でなくなったときの不安をもたらすからである。身体的観察者モードは、そうした孤独とストレスからの癒しを求める心的システムの状態とも言える。義務を負った理性的個人としての鎧を脱ぎ捨て、日常の抑圧的な社会秩序や権力から解放されて、役割に局限されない自分の全体性や他者との一体性を体験するのは、フランスの思想家G. バタイユが論じたような至福の体験とも考えられ、権力秩序が転覆するような祝祭や、恋人同士の親密なふれあい、遊びなどをつうじて実現される⁽²⁷⁾。また、解放感と安心感を覚えるような、母と子との一体性の体験もここに含まれると考えられる。この意味で、身体的観察者モードは、喪失体験以前の安定した心的システムの状態とも言えるだろう。

しかし、他者との差異がなくなるような感覚はあくまで非日常的瞬間に実現する(いわば幸運な)体験であることを忘れ、祝祭のような秩序の転覆状態を日常化しようとする、逆に不自由な状態に陥ってしまう。有用であるように追い立てられる機械的存在(あり方)からの解放を求めたにもかかわらず、日常的ストレスへの対症療法的な逃避が習慣化し安心感の獲得が自己目的化してしまうと、安心感を与えてくれる対象や相手に依存する新たな機械的存在として唯一性・自律性を失ってしまうだろう⁽²⁸⁾。そればかりか、不安に苛まれ

るような緊張状態が続けば、その不全感の原因を外部に作りだして怒りなどの負の感情や暴力をぶつけてしまいかねない。したがって身体的観察者モードだけでは喪失体験の意味を(一時的に回復させるように見えても)本質的に回復させることは難しい。

4.2 【II】感情的観察者モード

孤独が癒やされた理想の状態を喪失した時や、孤独から救い出してくれる理想者を喪失した時、私たちは感情的観察者モードを経験する。理想性の希求は心的システムの身体的観察者と感情的観察者に共通する「開放性」のあらわれである。理想の自分の状態や理想の他者と内的・体験的に一致できれば身体的観察者の安定状態と言えるが、理想的な一致の調和が破れた感情的観察者モードではメランコリーや絶望が襲いかかる。感情的観察者モードはいわゆるロールモデルとしての理想を持つのと違い、むしろ不安や問題を解決してくれる救世主としての人間や事物に全面的に頼るような、英雄崇拜(偶像崇拜)に近いと言えるかもしれない。

感情的観察者という呼称の理由は、それが意識化された情動すなわち好悪の感情に基づいて自分にとっての「理想性」を求めるからである。このモードでは、心的システムは何らかの対象が理想的か否かを外在的観点から評価する(いわば裁く)ように思考や認知を進めていく。その結果として感情的観察者は、たとえば理想者への執着や見捨てられるような恐れ、逆に理想にたいする幻滅や意気消沈、そして理想と比べた自責の念などの意味を産出することがある。

システムの外部に理想的な救済者を求める志向は、APSの自律性に基づく閉鎖性を自ら放棄したインプット=アウトプット型の開放性への傾倒となり、それは、自分が他者の救済者になろうとする心のはたらきにも容易に転化する。そのため、感情的観察者は支配や世話焼き、全能感や他責の

念としても具現化する。しかし、そのようにして好悪の感情に基づく理想を他者に投影し期待しても、相手の心的システムも自律性を有するAPSである以上、本質的に報われることはなく、むしろ相手は無条件に受け容れることはできないという関係破綻の種となるメッセージを送ることにもなりかねない。

他方、感情的観察者モードが発現することで、心的システムの作動の特性を把握する契機とすることも可能である。私たちは現在に生じた喪失体験に苦しむが、同時にその苦しみは過去に経験した類似の喪失体験の苦しみの追体験でもあるかもしれない。おそらく苦しみやメランコリーなどの感情は現在・過去・未来を区別できないのであり、感情的観察者は多声的・複層的な感情の実現態と考えられる。つまり過去のメランコリーが癒されるために表現され前景化されたものとして現在のメランコリーを理解できる面がある。この点で喪失体験の本質である意味喪失は内的原因を有していると考えることができ、それは同じ喪失体験にたいする感情や意味づけが人によって異なることから示されると思われる。

4.3 【Ⅲ】 自立的観察者モード

身体的観察者モードと感情的観察者モードは、一体化できるような理想性（理想の状態や理想の相手）を求める点で、極端に言えば他者を想定しない一人称のモードである。相手（対象）を自己像を得るための鏡とみなせば、思い通りの現実を映してくれる対象を理想者として利用するナルシズムに陥ってしまう⁽²⁹⁾。ここでは理想性は有用性と同義になりかねない。

これに対して、自立的観察者モードは、「唯一性・自律性の尊重」の観点から自他を区別する、脱一人称的な立場である。情動や感情を理性的に客観視できる自己距離化力を有するモードでもある。

喪失体験を生き延びるためには、理想性の観点から自他を判断することをやめる必要がある。な

ぜなら、理想性に基づく判断すなわち裁く気持ちがメランコリー（満たされない抑うつ）の源泉と言ってもよいからである。理想性の観点では唯一性・自律性という人格の本来的な「意味」が忘却されてしまう。

自立的観察者の連辞的メディアは「尊重／支配」である。自己の理想性による「支配」を断念し、他者の自律性の「尊重」を原理とすることから、観察者としての「自立」が生じる。尊重とは安易に判断しないことである。一方でシステムの外部に想定した理想性を基準とする感情的観察者モードでは、手段として都合よいかという観点から対象の良し悪しや好き嫌いを安易に判断しがちになる。それは対象システムの自律性への尊重を伴わない暴力的な侵入にもなりうる。

唯一性・自律性の尊重は、それ自体が、喪失のメランコリーを悲しみへと移行させる「意味」になりうる。前述のフランクフルは、苦悩がたとえば犠牲という「意味」を与えられると、それが単なる苦悩であることをやめ、意味ある苦悩となって全体的な生きる意味の一部に組み込まれることを指摘している⁽³⁰⁾。このように、喪失体験を含む固有の生の軌跡を、全体的な生きる意味を構成する一種の「物語 (roman)」として捉え直すことにより、自分自身の唯一性・自律性に向き合うことが可能となり、外的理想に依存しない自立的様態へと心的システムが進化し、他者とより本質的な次元のパートナーシップを構築する条件が整う⁽³¹⁾。

自立的観察者モードの特徴として、普遍性への志向が挙げられる。唯一性は、実践的には個別の多様な物語として実現されるものの、その本質は自他を単なる目的実現のための手段ではなく、むしろ目的（個別の物語を持ち意味実現へと向かう存在）とみなす態度の普遍性にあると考えられる。この意味において、唯一性とは単なる個別性ではなく自律性という普遍性への志向であり、またその結果なのである。一人称的・一次観察的な理想性の喪失をきっかけに、唯一性という普遍性を志

向する観察枠組の刷新は、新たな力や希望や絆の源として喪失体験の価値を反転させるきわめて重要な契機となりうる。

自他をそれ自体が目的であるとみなす（リラックスした＝支配しない）「ロマン」主義の観察観点を採れば、範列的メディアの一つである喜びや楽しさが生じてくる。それは有用性や合理性ではなく唯一性にに基づく自発的な喜びである。いわば身体的観察者・感情的観察者の快樂主義における刹那的・反動的喜びから、自立的観察者・内部観察者の「ロマン」主義における発見的・創造的喜びへの移行である⁽³²⁾。フランクが論じるように、喜びはそれ自体が目的とされるときには得られず、意味回復の結果としてもたらされると言える。

4.4 【IV】内部観察者モード

無力を痛感させ徹底的に謙虚にさせるような喪失体験をつうじて、心的システムは「超越性⁽³³⁾」に向かう内部観察者モードに到る。私たちは喪失に寄り添い共に苦しんでくれる他者のあり方⁽³⁴⁾や、すでに論じたような喪失をめぐる赦しの体験によって、超越性を体験するだろう。超越性とはシステムがその自律性・閉鎖性を保持したままで、それを超越するように他のシステムに内在的観察を行う様態である。内部観察者の内在性は差異を消去した身体的観察者モードの同一化ではなく、相手の苦しみを自分のものとして内在的に体験するような「共感」である。共感は、内部観察者の連辞的メディアと言える。

理想性の代わりに、成り代わってくれるような超越性がシステムに内在しているのに気づくと、それに依拠して自らを導くだけでなく、他の心的システムを公平に観察する内部観察者へと徐々に変化されていくことがある。喪失を契機に連帯や共同体性へと導かれる経験である。それは自己の利害を超える公平性を持って理解しようとし、相手の立場で状況の意味を構成する観察者のモード

と言える。このように「寄り添う」ことを成果メディアとする心的システムの作動は、むしろ相手の真の必要に応えるという受動性を導く。内部観察者は自力で自分を変化させる克己主義ではなく、むしろ超越性への「従順」によって可能になると考えられる。

このように、相手に「寄り添う」内部観察者の範列的メディアには、たとえば、自分は苦しくても相手のために笑うようなユーモアも含まれるだろう。そしてそれは、喪失という結果に直面してそれまでの時間すべてが無駄だったのだろうかとか苦しむ人の絶望を反転させる助けにもなりうる。このような見返りを求めない愛^{かな}しみは喪失の悲しみに裏打ちされることで実現されることがある。結果的に相手に寄り添うという超越性のメッセージを体現するなら、それはあたかも蛹から蝶がはばたくような、心的システムの「メタモルフォーゼ」とも言えるものではないだろうか⁽³⁵⁾。それは同様に苦しむ他者にも、意味の回復によって喪失の絶望に希望をもたらすようなメタモルフォーゼを実現させるかもしれない。

5 結論——「にもかかわらずではなく、だからこそ」の希望

本研究では、いかにして喪失体験とともに生きられるかという問いにとりくんできた。まず、喪失の苦難の本質が意味の喪失である点を明らかにし、喪失体験をめぐる一種の「内部観察」の実践をつうじて、いかに意味を回復させられるかを論じた。方法論として、心的システム論を深化させ、喪失とともに生きられるようになる道程を心的システムの「4モードモデル」として提案した。このモデルに即して、喪失体験に意味を取り戻す過程について論じ、それが心的システムの発達でもあることを明らかにした。

結論として、心的システム本来の自律性・閉鎖性を十分に実現させることが意味回復によって喪

失を生き延びるための最初の契機であり、不条理に思われることさえある理想性の喪失体験の結果、超越性に「従う」内部観察者として、同じように苦しむ他者の意味回復に自然に寄り添っていきける可能性があるかと考察した。喪失の苦難の意味＝価値は何度でもあらたに反転されうるし、最も無駄と思えるような絶望的結果が、それなくしてはありえなかった共同体性をもたらす連帯の源に変わることさえもある⁽³⁶⁾。こうした逆転の希望を諦めず、超越性を受け入れていく心的態度が、喪失体験を生き延び、そこからの再生を可能にする力の一つであると考えられる。

なお4モードモデルは進化という新たな分析観点を心的システム論に導入したが、心的システム発達の具体的な契機やメカニズムについては稿を改めたい。それは、メランコリーにつながるような「旧知の観察枠組すなわちモードにいかにか逆戻りせずにはすむか」という課題の考察にもなるだろう。

注

- (1) 喪失が他人事でないと感じると、苦しむ他者は私たちの代わりに苦しみを担ってくれているのではないかとさえ切実に思われてくる。「人類のためによるこんで苦しむ」代受苦の実践としてのロマン主義が、C. ヒルティによって紹介されている。ヒルティ (1965), pp. 103-4.
- (2) 西垣通・伊藤守 (2015) を参照。
- (3) 具体的には、心的システムという用語を用いるN. ルーマン (1984) や西垣通 (2004,2008) らの研究のほか、システムの観点から認知について考察するH. マトゥラーナら (1997) やF. ヴアレラ (1979) などの研究も含む。構成主義というより広い観点から見れば、E. v. グレーザーズフェルド (2010) の知識論なども関連研究と言える。
- (4) システム進化という分析観点は、たとえば

文学システムの進化として近現代の文学史を理解する「文学システム論」に多様な形で実現されてきた。『思想』(2010)を参照。

- (5) S. フロイド (1987), pp. 128-9。ルビと太字による強調は筆者による。
- (6) ここでいう癒しとは、喪失を忘れ去ることや完全に乗り越えることではなく、喪失とともに生きられるようになることを意味している。
- (7) 失恋自死遺族の体験談はこの種のメランコリーの酷烈さと回復への重要な示唆を提供してくれる。「失恋自死 (自殺) を防ぐために」(URLはaddictionの意だがaddictionである点に注意)。
- (8) AA(Alcoholics Anonymous) と呼ばれるアルコール依存症回復のための自助グループが米国で提唱した「12ステップ」に含まれている。12ステップは、対人依存的な心の問題の回復のためにも応用されてきた。
- (9) 筆者との研究対話における発言。
- (10) 既述の「12ステップ」にあてはめれば「ステップ2」における「信じる」ことに対応すると考えられる。なお芸術家の荒川修作とマドリン・ギンズによる「天命反転」の思想も同様のことを意味すると思われる。すなわち死という一見絶望的な喪失の意味は反転可能という思想である。
- (11) 関連して、対人依存を含む各種の依存症の問題に十全にとりくむには社会権力などの環境要因の改善が必要という、妥当な認識が広まりつつある。しかし本研究では、外部からの刺激を意味付けるのは最終的には当該システムであるという点に焦点を絞っている。
- (12) sadnessの定義には他者の不幸を憐れむ気持ち (a sad feeling, caused [……] when you feel sorry about someone else's unhappiness) が含まれている (『ロング

- マン現代英英辞典』)。
- (13) オートポイエーシス理論は認知メカニズムを主な研究関心として生まれた。つぎの文献ではその歴史について応用研究も含めて詳述されている。『思想』(前掲書)。
- (14) 閉鎖性はハトの色視をめぐる研究から明らかにされたAPSの基底的特質である。H. マトゥラーナら (1991), pp. 20-1 参照。なお、物質レベルでの閉鎖性にたいして意味レベルでのシステムの閉鎖性は精確には「情報の閉鎖」性と呼ばれており、本研究で主に扱うのは後者である。橋本渉(2008)。
- (15) 西川アサキは筆者との研究対話で「オートポイエーシスはときに自己破壊的になる」旨を述べた。
- (16) つぎのカウンセリング事例が参考になる。勝田芽生 (2010), p. 89, 91.
- (17) 心的システムが意味構成体としての自己認識を得ることを本研究が強調する点(後述する感情的観察者モードから自立的観察者モードへの移行)は、アドラー心理学との相似を指摘される可能性がある。しかし、本研究の「自己超越」という立場は自己の理想性の実現を目指すという意味での克己主義でも単なる禁欲主義でもなく、自己の理想性から注意を逸らして、人生における潜在的な意味や価値に「応え」てそれらを実現させようとする「注意の転換」を指している。既述の「12のステップ」を想起すれば「ステップ3」として理解できると思われる。
- (18) 二次観察は「観察についての観察」というメタレベルでの観察を意味する用語なので、精確には三人称による分析的思考も「二次観察」に含まれる。しかし本研究では、二次観察のうちでも、内部観察者による脱一人称の共感的理解を重視する。
- (19) V. E. フランクル (1983). わかりやすくするために、後述する4モードモデルに対応させてみるならば、身体はI、心理(性格)はII、精神(人格)はIIIとIVである。人格についてより詳しく考察する便宜上、IIIとIVを区別した。IIIは自己距離化能力・対外志向性、IVは自己超越・意味への意志に、それぞれ主に対応すると考えることができる。勝田芽生 (2008), pp. 79-80を参照。なお、異なる次元が同時に実現されることもあるだろう。たとえば、身体的接触が人格的な愛情表現であるとき、身体次元と精神次元とが同時に実現していると言える。
- (20) 思考の限界を「頭中心主義」として批判した関連論考がある。思考は「超越性」(下記の関連論考では「生命力」と表現されている)のために用いられるときにはじめて十全な価値を持つと考えられる。大井奈美 (2018)。
- (21) 能力と唯一性との区別については、人間と機械との関係をめぐるつぎの議論も参考になる。西垣通 (1990=2008), 第1章。
- (22) 西垣通 (2008). 生命や情動概念に基づく情報哲学の観察論にとって内部観察者概念は前時代的と誤解されるかもしれない。しかし本研究は理性や知性の中心主義ではない点でそれらの観察論と軌を一にしている。また、「超越性」と不可分に結びついた人格という点から観察を再評価することで、観察行為の新たな意義を提案するものでもある。
- (23) 参考論文として次のものが挙げられる。原島大輔 (2015). 注16の事例も参照。
- (24) 4モードモデル着想の一つの契機には心理学における孤独の発達モデルがある(落合良行 (1989), p. 73)。とりわけ本研究第4章で詳述するようなIからIVへ到る発達順および性格モード(II)の成果メディアである「理想性」は基本的に落合のモデル

から着想した。しかし、喪失に注目しつつ心の発達一般を考察対象にした点などが落合の研究とは異なっている。とりわけ、II（感情的観察者モード）の危機からIII（自立的観察者モード）への移行を喪失体験克服への最重要契機とみなす本研究は、心の発達におけるIIIの重要性を強調しており、「理解者さえ出てくれば孤独感は消える」状態を「人格形成上の否定的影響は少ない」（落合, p. 153）ものとは考えない。むしろ、外部の理想者さえ現れれば自己の問題が解決されると前提しているIIは自他の唯一性・自律性を認識しているIIIよりも絶望的な状態と捉え、IIのメランコリーにとどまれば自殺にさえつながりかねないほど危険と考える。このように本研究と落合の研究とは、分析観点やモデル自体だけでなくその評価や位置づけも異なる。

- (25) 3つのメディアの専門的定義は西垣通(2004, 2008)を参照。なお成果メディアは社会学者N.ルーマンによる研究の主要概念でもある。
- (26) 精確には範列的メディアはあるテーマをめぐり思考の素材群を指すが、本研究ではモデル理解の便宜上、思考の結果として生じる具体的事象群と位置づけた。
- (27) つぎの書籍を参照。G. バタイユ (1970), (2003).
- (28) これはバタイユの恋愛論におけるあたかも一体化するようなコミュニケーションの限界と考えられる。G. バタイユ (2015), その他, 前述のバタイユ (1970) も参照。
- (29) ラカンの鏡像段階が想起される。関連して、情報技術を「鏡」にした自己像の取得をめぐり議論も興味深い。西垣通 (1990=2008), 最終章。
- (30) V. E. フランクル (2016b), pp.41-2.
- (31) たとえば「普通」であることすら理想性で

ありうるが、そのような固定観念から外在的になって唯一性を生きるシステムのあり方が、つぎのエピソードによく表現されている。R. N. リーマン (2000), pp. 170-1.

- (32) 快楽主義からロマン主義へというテーマは芸術分析にもみられる。たとえばR. バルトは写真論 (1997) のなかで、快楽主義ではなくロマン主義の観点から、母の本質を唯一性を有する人格にみた。
- (33) 超越性についてフランクルは「精神的無意識」あるいは「識られざる神」と表現している。自己の利害を意識しないことが無意識や神という言葉で表現されているように思われる。V. E. フランクル (2016a).
- (34) 芸術をつうじて他者に寄り添う内部観察の実践も多い。たとえば、喪失をテーマにした中原中也の詩「春日狂想」が挙げられる。
- (35) メタモルフォーゼはシステム理論の重要なテーマの一つであり、とくに身体や文学のシステム論的研究のキーワードである。
- (36) 喪失の苦難そのものは肯定できなくて当然であるが、それをつうじて「生きる意味が私たちに迫ってくるものは受け止めていこうとする、当事者の尊い証言がある。河原理子 (2012), pp. 72-9.

参考文献

- 大井奈美 (2018) 「情報の基としての贈与」, 西垣通編『基礎情報学のフロンティア』東京大学出版会.
- 落合良行 (1989) 『青年期における孤独感の構造』風間書房.
- 勝田芽生 (2008) 『フランクルの生涯とロゴセラピー』システムパブリカ.
- 勝田芽生 (2010) 『神経症のロゴセラピーII』システムパブリカ.
- 『思想』(2010. 7) 岩波書店.
- 「失恋自死 (自殺) を防ぐために」,

- <<http://love-addction.seesaa.net>> Accessed 2018, October 1.
- 河原理子『フランクフル『夜と霧』への旅』平凡社, 2012.
- 西垣通 (1990=2008) 『デジタルナルシス』講談社現代文庫.
- 西垣通 (2004) 『基礎情報学』NTT出版.
- 西垣通 (2008) 『続 基礎情報学』NTT出版.
- 西垣通・伊藤守編著 (2015) 『よくわかる社会情報学』ミネルヴァ書房.
- 橋本渉 (2008) 「システム論における「情報的閉鎖系」概念」東京大学大学院情報学環紀要『情報学研究』75, pp. 69-82.
- 原島大輔 (2015) 「閉鎖かつ開放——情報技術環境における生命システムの条件についてのネオサイバネティクスの考察」『情報メディア研究』13 (1), pp. 60-80.
『ロングマン現代英英辞典』
<<https://www.ldoceonline.com/jp/dictionary/sadness>> Accessed 2018, October 5.
- C. ヒルティ (1965) 『幸福論 第三部』草間平作・大和邦太郎訳, 岩波書店.
- E. v. グレーザーズフェルド (2010) 『ラディカル構成主義』西垣通監修・橋本渉訳, NTT出版.
- F. Varela (1979) *Principles of Biological Autonomy*, Elsevier.
- G. バタイユ (1970) 『内的体験』出口裕弘訳, 現代思潮新社.
- G. バタイユ (2003) 『呪われた部分 有用性の限界』中山元訳, 筑摩書房.
- G. バタイユ (2015) 『魔法使いの弟子』酒井健訳, 景文館書店.
- H. マトゥラーナ・F. ヴァレラ (1997) 『知恵の樹』管啓次郎訳, 筑摩書房.
- H. マトゥラーナ・F. ヴァレラ (1991) 『オートポイエーシス』河本英夫訳, 国文社.
- N. ルーマン (1984=1993-1995) 『社会システム理論』佐藤勉監訳, 恒社厚生閣.
- R. バルト (1997) 『明るい部屋』花輪光訳, みすず書房, (新装版).
- R. N. リーメン (2000) 『失われた物語を求めて』藤本和子編訳, 中央公論新社.
- S. フロイド (1987) 「悲哀とメランコリー」, 『不安の問題』加藤正明訳, 日本教文社, フロイド選集10巻 (改訂版), pp. 128-9.
- V. E. フランクフル (1983) 『死と愛』霜山徳爾訳, みすず書房.
- V. E. フランクフル (2016a) 『識られざる神』佐野利勝ほか訳, みすず書房, (新装版).
- V. E. フランクフル (2016b) 『ロゴセラピーのエッセンス: 18の基本概念』赤坂桃子訳, 新教出版社.